

「岡山県の和牛について」(続編)

寺岡 敏昭(岡山県職OB)

去る7月号の畜産便りに、投稿を依頼されて「岡山県の和牛改良と変遷について」を記述させて頂きましたが、紙面の都合で記述出来なかった事項について、追加記述することにしました。

和牛の改良には、雌方の系統もさる事ながら、何と云っても種雄牛の遺伝力はその主体性を占めており、どの系統の雌にも相性の良い種雄牛を造成する事が、何より重要と考えられます。本県では、ご案内のとおり、藤良系の糸藤号が当時の世代に君臨して来た時代がありました。しかし、猛毒な腸内細菌のために、当時、大佐町にあった和牛試験場で死亡しました。

さて、食肉市場に在職していた時、肉質調査を実施した事がありました。かつての名牛と呼ばれていた高庭号の母方に、藤良系の糸藤号の父方を交配したところ、80%以上の牛にA4以上の肉質が見られた事を経験しました。残念ながら、高庭号の突然の死亡で、しかも、その時点で精液の保存が300本足らずという有様で、我々にも大いに責任があった事を記憶しております。現地で死亡牛を剖検した際に、つくづく感じた事は、飼育されていた牛舎の環境及び飼料の内容並びに給与方法等が管理者個人個人の心構えがいかに大事であるかという事を痛感致しました。

話変わって、かつて名牛として知られて来た第3糸桜号、第2安茂勝号は、どの系統の雌牛に交配しても、平均的な肉質が生産され、特に、第3糸桜号の産子の市場価格は、群を抜いて高価格で取引されており

ましたが、腸膿瘍のために残念ながら死亡致しました。こうして、次々と名牛が死亡し、本県の和牛改良に暗影が立ちこめたのも事実でした。

一方、試験場等で実施されていた子牛の早期離乳は、画期的な試験で、母牛の次回発情をいかに早めるかという事が目的で実施されたものであり、繁殖牛の使命は、一年一産する事が重要であり、分娩後、3ヶ月以内に受胎させると、年1産することになり、そのためには、畜主自身の理解と技術者との相互の協力体制が何より重要です。

一方、特に、最近では農家との深い繋がりが疎遠になっているように思われます。以前、我々が昼夜を問わず診療あるいは人工授精を実施していた当時は、ほとんどの家に入出入りしていたので、台所に入って昼食やお茶を頂いて、その際、農家の事情等、腹を割って話されていたので、その家庭にあった指導、アドバイスが可能な事が多く、必然的に信頼を得る事が出来た時代に生きて来た我々は、生き甲斐を感じて仕事をさせて頂いた事を今でも感謝致しております。

現在、年1回の久世市場での共進会で思わぬ人達から声を掛けられ、懐かしく昔話に花が咲く事があります。現在、疎遠になりがちな農家への対応をいかにすべきか、現職の皆様にご期待しながら筆を置く事にします。